

# Morphology & Lexicon Forum 2015

日時 2015年9月5日(土) 13:45～、9月6日(日) 10:15～

場所 東北大学 川内キャンパス マルチメディア教育研究棟6階

<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/areaa.html>

5日(土) 受付 13:30 から

13:45-14:35	発表 1	十世紀日本語京都方言動詞形態音韻論 —最適性理論を用いた分析の試み—	笠間裕一郎(東京外国 語大学大学院)
14:45-15:35	発表 2	日本語の複雑述語の形成と「定性」	長谷部郁子(筑波大学 非常勤講師)
15:35-15:55		休憩	
15:55-16:45	発表 3	Time of Case Morphology – A View from Nominative-Genitive Conversion in Japanese	嶋村貢志(三重大学特 任講師)
16:55-17:45	発表 4	静止状態の維持とシテイル形式の文法 化	畠山真一(尚絅大学)
18:00～		懇親会	

6(日) 受付 10:00 から

10:15-11:45	講演	The ordering of functional categories in the Japanese verb cluster	ナロック・ハイコ(東 北大学)
11:45-13:15		休憩 ランチ	
13:15-14:05	発表 5	形態的・意味的特性による中国語結果複 合動詞の体系化への試み	于一楽(滋賀大学)
14:15-15:35	招待 発表	情報構造のマーカ―としての博多方言 の終助詞バイとタイ	長野明子(東北大学)

宿泊、懇親会、昼食については、次のページをご参照下さい。

## 9月5日（土）の宿泊について

当日、仙台市内で行われるイベントのため、ホテルの予約が大変取りにくい状況になっております。そのため、今回は運営委員会が参加者のためにホテルの部屋を用意いたしました。部屋数に限りがありますので、先着順とさせていただきます。宿泊を予定されている方は8月20日（木）までにお申し込みください。申し込みは下記までメールでお願いします。申し込みのメールの件名には「MLF宿泊申し込み」と記してください。なお8月20日（木）をすぎても部屋がある可能性もありますので、メールでご確認ください。

\* ホテル名：グリーンホテルウイズ

<http://www.bh-green.co.jp/hotel/with/outline.html>

\* 金額：1泊朝食付 9,000円（税込）（支払い方法は申し込みの際ご確認ください。）

\* 申込先

JTB東北

鎌田 貢治 様

TEL:022(263)6712

FAX:022(263)6693

E-MAIL:[k\\_kamata344](mailto:k_kamata344@th.jtb.jp)に続けて[@th.jtb.jp](mailto:th.jtb.jp)

ホームページ:<http://www.jtb.co.jp/shop/houjinsendai/>

## 懇親会

懇親会は東北大学キャンパス内 bush clover cafeで行います。参加ご希望の方は、8月20日（木）までに小野（[naoyuki.ono.b7](mailto:naoyuki.ono.b7@tohoku.ac.jp)に続けて[@tohoku.ac.jp](mailto:tohoku.ac.jp)）までメールでお申し込みください。会費は一般5,000円、学生2,000円です。

## 昼食

6日（日）はキャンパス内の食堂は開いていません。昼食は近くのコンビニなどでお願いします。会場での飲食は可能です。

十世紀日本語京都方言動詞形態音韻論  
——最適性理論を用いた分析の試み——

キーワード：平安時代語 動詞形態論 形態音韻論 最適性理論 音節構造

——発表要旨——

問題の所在

これまでも、平安時代日本語京都方言の動詞形態論の言語学的見地からの分析は幾つか散見される。しかし形態音韻論に就ては散発的に、それも散文の形で言及されるのが一般的である。形式的な言及がなされたものは、最適性理論を用いた分析である Nishiyama(1996)、同(1999)を除けば殆んど見当たらず、これも部分的な分析に留る。また、形態分析でも分節音形から「アクセント」迄含む、包括的な議論はない。

議論の流れ

本発表では、まづ簡単に十世紀日本語京都方言の動詞形態論に就て、所謂「アクセント」も含めた音形からその體系にまで至る包括的な議論を行なふ。

その上で最適性理論 (Prince and Smolensky(1993/2004)) に基づき、この方言の動詞形態音韻論の包括的な分析を試みる。

結論

従来学校文法の枠組みに於ては「助動詞」や「助詞」とされてきた形式の内、「助動詞ル・ラル」「助動詞ス・サス」「助動詞ベシ」「助動詞マジ」「助動詞ザリ」「助動詞ツ」「助動詞ヌ」「助動詞タリ」は何れも派生接尾辞である。その他の「動詞・動詞型活用の助動詞・形容詞カリ活用に後接する助詞・助動詞（例へば「マシ」「ム」等）」は屈折接尾辞であることを示す。また、「連體形」屈折接尾辞は /H/ トーンを持つ屈折接尾辞である事を示す。

續いて、基本音節構造は極めて高い位置にある \*COMPLEX と NoCODA 制約により (C)V であり、他の忠實性制約や \*C-C（接辞（非文法語）境界での子音連続の禁止）・\*V-V（接辞境界（非文法語）境界での母音連続の禁止）と CODA COND 等

の相互作用による時にこれが破られる事を示す。

またこの方言には、語基と接尾辭の間に制約の相互作用による「固さの階層」が存在し、音節構造制約や韻律・形態のインターフェイス制約とあいまって語基末子音の變換、語基末母音若しくは接尾辭初頭母音削除が生じる。

加へて、上代語に於て「一段動詞連用形」に後接してみた「助動詞」（言語學的には接尾辭）が中古語以降「一段動詞終止形」に後接する様になる現象は、關與する DEP・MAX・LINEARITY 制約の階層の變化により生じる事を示す。

#### 本質的に重要なデータ

本発表に於て本質的に重要なデータは、この方言の基本音節構造が(C)Vであり、且その修復方略としての分節音挿入が存在しない点である。

この事實が、各動詞に於て表層に現はれる分節音を形態素基底形に想定させ、「固さの階層」による削除位置の選擇や「一段動詞」における上代から中古にかけての「承接」の變更を惹起こす。

#### セールスポイント

本発表の特徴は、十世紀日本語京都方言を対象に、音韻論も視野に入れつつ形態論（特に形態音韻論）の包括的分析を行なはふとする点にある。また、前時代の言語事實とも對照しながら、その妥當性を検討する点もある。

#### 參照文獻

Nishiyama, Kunio(1996) "Historical Change of Japanese Verbs and Its Implications for Optimality Theory." *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2 MIT Working Papers in Linguistics 29*

Nishiyama, Kunio(1999) "Two Levelings in Japanese Verbal Conjugation" 『コミュニケーション学科論集』6

プリンス、アラン、ポール・スモレンスキー、深澤はるか譯(2008)『最適性理論生成文法における制約相互作用』岩波書店 (Prince, Alan and Paul Smolensky(2004) *OPTIMALITY THEORY Constraint Interaction in Generative Grammar* Oxford:Blackwell Publishing

日本語の複雑述語の形成と「定性」

キーワード：複雑述語、事象情報、百科事典的知識、編入、定性

本論で扱うのは以下に示す日本語の複雑述語である。(1)に示される複合動詞の場合、(1a)のように複数の動詞から成るものと(1b)のように名詞と動詞から成るものが存在し、(2)に示される複合形容詞の場合、(2a)のように他の述語や接辞と形容詞から成るものと(2b, 2c)のように名詞と形容詞から成るものが存在する。(2b)の名詞は「が」格標示が可能だが(2c)の名詞は不可能であり、(2c)の基体形容詞は(2b)の基体形容詞が保持している本来の語彙的意味を失っている。

- (1) a. 踏み潰す、歩き疲れる、遊び倒す、食べ始める (V + V 型複合動詞)
- b. 腰かける、心がける、色づく、旅立つ、元気づける (N + V 型複合動詞)
- (2) a. 青白い、蒸し暑い、寝苦しい、もの凄いの (述語又は接辞 + A 型複合動詞)
- b. 心 (が) 優しい、名 (が) 高い、信心 (が) 深い (N + A 型複合動詞)
- c. 心 (\*が) 細い、手 (\*が) 厚い、腹 (\*が) 黒い (N + A 型複合動詞)

影山 (2015) は、日本語においては(1a)型の複合動詞は生産性が高いのに対し(1b)型の複合動詞は生産性が限られていることに着目し、こうした生産性の違いを「定性」の概念を基準とした類型論に基づき説明している。影山 (2015) において、「定性」は「文のイベント性をどれほど形態的に表示するかによって決まる段階的な概念」と定義され、日本語のような膠着型言語においては「定性」が動詞に（補助）動詞が取り込まれることを誘発し、動詞への名詞編入の操作の生産性は、「非定性」の度合いが高い場合に高まると議論されている。

本論では、(2)に例示される複合形容詞の生産性についても、(1)の複合動詞の生産性同様、影山 (2015) における「定性」に基づいた説明が可能であると仮定する。また、「統語派生」、「辞書（百科事典的情報 (cf. Pustejovsky (1995)) と素性の情報を含む)」、「事象情報（概念構造と項構造を含む）」がそれぞれ自律し互いに関係し合うモジュールを成すモデルを提示し、(1a)や(2a)のように複数の述語から成る複雑述語の形成には各述語が有する「事象情報」が、(1b)や(2b, c)のように名詞と述語から成る複雑述語の形成には名詞や基体形容詞が有する「辞書」の百科事典的情報がそれぞれ関与すると主張する (cf. 影山 (1980))。

(2b, c)のような複合形容詞の形成にあたっては、(3)に示すように形容詞の主語になる名詞ならばどのような名詞でも編入が許されるというわけではない

(由本・影山 (2009) も参照)。また、これらの複合形容詞に含まれる名詞には、たとえば「心」や「腹」など、主語と分離不可能なものを表すものが多い。

(3) \*腹痛い (cf. 腹が痛い)、\*信心浅い (cf. 信心が浅い) cf. 信心深い

本論では、基体形容詞に編入される名詞は、主語と分離不可能なもの、もしくは主語からの分離が困難な思考や所有物 (名声や信念など)、性格でなければならず、かつ、(2b)のように基体形容詞の意味が複合形容詞形成後も損なわれない場合、基体形容詞は主語固有の「属性」(「属性」の定義は影山 (2012) に準ずる) を表すのに有意義な尺度を表さなければならないと議論する (たとえば「信心の深さ」は有意義な尺度となりうるが、「信心の浅さ」はなりえない。腹痛の度合いは主語固有の「属性」を表す尺度ではない)。また、形成された複合形容詞は主語の「心的態度 (モダリティ)」や「属性」を表すものでなくてはならない。

ところで、影山 (2015) の定義においては、「属性」が最も「非定性」の度合いが高いとされ、さらに、イベント性を形態的に表示する手段や概念として格標示や時制、一致、そしてモダリティが挙げられており、時制を伴わない、または時制次第で人称一致制限の影響を受ける一部のモダリティ表現には「非定性」の度合いが高いと考えられるものもある。また、(1b)型の複合動詞には「腰 (を) 掛ける」のように動詞本来の格標示を喪失したものや「旅立つ」のように意味の透明性がなくなったものが少なくないが、同様のことが(2b, c)型の複合形容詞にも当てはまり、このことは、日本語における名詞編入による複雑述語の形成の可否には、基体の語彙範疇に関わらず等しく「定性」という概念が関わるという主張を支持する。本論はさらに、影山 (1993) によって提案された「モジュール形態論」の枠組みの発展にも理論的貢献をもたらす。

参照文献：影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』松柏社。/ 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。/ 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版. 3-35/ 影山太郎 (2015) 「2種類の複合動詞と Finiteness」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」における講演 (於東京大学) 。/ 由本陽子・影山太郎 (2009) 「名詞を含む複合形容詞」影山太郎 (編) 『形容詞・副詞の意味と構文』、223-257. 大修館書店。/ Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass: MIT Press.

*Time of Case Morphology—A View from Nominative-Genitive Conversion in Japanese*

**Keywords:** NOMINATIVE-GENITIVE CONVERSION, TENSE, SEMANTICS, PHASE, D

**Introduction:** Crosslinguistically, case morphology (CM) and T(ense)A(spect)M(odality) are intertwined with each other (e.g. English, Stowell 1982; Kayardild, Evans 1995; Romanian, Alboiu 2006; Lardil, Richards 2014), which allows us to regard CM as the morphological incarnation of TAM-related features (cf. Pesetsky and Torrego 2001 *i.a.*). This talk adds to such a view to CM: to wit, I argue that the Nominative-Genitive Conversion (NGC) under the nominal complementizer *no* in Japanese requires the presence of D (cf. Miyagawa 2011 *i.a.*), but it has nothing to do with the presence of genitive (GEN) subjects *per se*. Rather, I argue: (i) GEN itself is licensed by the nominal nature of the clause (e.g. CP) where it appears (Hiraiwa 2005 *i.a.*); (ii) D is needed to license the embedded tense and hence its T-feature (Pesetsky and Torrego 2001, 2004).

**No-da Construction and NGC:** Albeit clauses headed by the nominal complementizer *no* readily allow NGC to apply as in (1), there is one case (among few others) that will not, namely, the *No-da* Construction (NdC) (cf. Mikami 1953; Hiraiwa 2005) in (2).

(1) *Kare-wa* [*Arisu-ga/no* *utat-ta-no*]-*o* *sit-tei-ta*.  
he-TOP Alice-NOM/GEN sing-PAST-C-ACC know-ASP-PAST  
'He knew that Alice had sung.'

(2) [*Arisu-ga/\*no* *utat-ta-no*] *dat-ta*.  
Alice-NOM/GEN sing-PAST-C COP-PAST  
'It was that Alice sang.'

Hiraiwa (2005: 152) argues that GEN is assignable iff the nominal complementizer itself has external CM as in (1), where ACC is assigned. However, why NGC necessitates this external licensing at all remains to be elucidated.

**Proposal:** Here, assuming that CM targets only DPs (cf. Kishimoto 2005), I propose: (i) D must be merged to the nominalized clause to license the temporality and hence T-feature of C; (ii) GEN will be (optionally) assigned at morphology if the nominalized clause is the trigger of Spell-Out. Precisely, the proposed structure of the embedded clause and its construal of (1) are provided in (3). In (3), C values both T and DP under T-feature (those valued are underlined) via Reverse Agree (Wurmbrand 2013).

- (3) [DP [CP [TP Alice-NOM/GEN<sub>[T: val1]</sub> sing T<sub>[T: val1]</sub>] C<sub>Phase[T: val1]</sub>] D (ι-Op)]-ACC ...  
 ≈ There is a unique time interval  $t$  such that Alice sang at  $t$ .

In (3), C has a temporal axis that is relativized to the matrix reference time (cf. Reichenbach 1947) and semantically closed by the ι-Op of D; it also enters into a temporal relation with T (via Reverse Agree), which denotes the embedded reference time; the embedded T then selects and hence licenses the embedded event. Since CP is complete in the sense that it has own T-feature (i.e. Case-feature; cf. Takahashi 2010), it triggers Spell-Out, sanctioning the (optional) assignment of GEN to the embedded subject. On the other hand, (2) would have (4) for its embedded structure.

- (4) [CP λs. [TP Alice-NOM<sub>[T: ]]</sub> sing T<sub>[T: ]]</sub> C] ...  
 ≈ the set of events  $s$  such that  $s$  is *singing* and the agent of  $s$  is *Alice*

In (4), C cannot have its own independent tense and hence T-feature, since it is not semantically closed via the ι-Op of D. Also, T cannot have its own T-feature valued, so it cannot license the event of vP. Thus, the embedded C-T is tenseless and semantically inert, so the embedded event is construed relative to the matrix tense. This is confirmed by the fact that the past under the past in (1) is interpreted as pluperfect, but in (2), the embedded past and the matrix past refer to the same past event, which is surprising, given that Japanese is not a sequence-of-time language (Ogihara 1995). Then, I argue that the embedded CP in (2) is not a phase due to its defective nature (Chomsky 2000), and that it does not trigger Spell-Out. The embedded TP and subject DP will get their T-features valued by the matrix C, as shown in (5).

- (5) [CP [TP [VP [CP λs. [TP Alice-NOM<sub>[T: val2]</sub> sing T<sub>[T: val2]</sub>] C] be] T<sub>[T: val2]</sub>] C<sub>[T: val2]</sub>]

In (5), the embedded CP is not phasal, so the matrix C can look into the interior of the embedded CP, triggering Spell-Out. However, since the trigger of Spell-Out is the matrix CP, not the nominalized CP, GEN will never be assigned at morphology; this explains why NGC is impossible in NdC. Anaphors show the categorial differences of the embedded CPs in (1) and (2). That is, only the embedded CP in (1) can be referred to by a pronoun, *sore* ‘it’, a sign of DP-hood, while that of (2) must be mentioned by adverbial *soo* ‘so’. **Selected References:** Hiraiwa, K. 2005. *Dimensions of symmetry in syntax: agreement and clausal architecture*. PhD Thesis, MIT.



## 静止状態の維持とシテイル形式の文法化

**keywords:** アスペクト, 結果状態維持, 文法化, 単文化

### 1. はじめに

本発表では、日本語の存在動詞イルの意味構造の中に「静止状態の維持」が含まれていることを指摘し、動詞のテ形を中核とする従属節とイルの語源であるキタリを述部とする主節により構成される複文が単文化したことにより、現代日本語のアスペクト形式シテイルの文法化が開始されたと主張する。

### 2. イルと状態維持

多くの先行研究が、「座る」、「立つ」、「寝転がる」といった動詞（以後、結果維持動詞）のシテイル形式によって記述される局面は、主体変化の結果である静止状態の維持を意味すると主張している（高橋 1985; 森山 1988; 日本語記述文法研究会 2007）。

森山（1988）は、これらの動詞に関して、「～ツヅケル」という局面動詞が後接可能であること、ナガラとママが交替可能であるという点を指摘している。「座る」を例にとって言えば、「座りツヅケル」が可能であり、「高級そうな椅子に座りナガラ/座ったママ、部下に指示を出していた」に観察されるようにナガラとママが交替可能である。

存在動詞イルも、同様のふるまいを見せる。「同じ場所にいつツヅケル」、「布団の中にいつナガラ/いたママ、エアコンにスイッチを入れることができる」はいずれも可能である。このように、イルは、結果維持動詞と同じふるまいを見せ、開始限界が不明確であるという静態動詞の性質も持つことから、金水（2006）の言う（疑似）限量的存在文の用法を除けば、辞書形で「存在の維持」を意味すると考えられる。

### 3. シテキタリ形式からシテイル形式へ

現代日本語のイルに対応する上代語のキルは、「座る、止まる」といった静止状態への変化を意味する動詞であったことが知られている（金水 2006）。平安時代以降、イルの直接の語源となる「キタリ」という形式が出現し、テ形と結びついた「シテキタリ」という形式が出現した。次の「シテキタリ」の例を見てみよう。

- (1) a. 「何ごとにかはべらむ。いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ」とて、うち笑ひてみたり（源氏物語、若紫）。
- b. 「物縫シテ居タリト聞クナベニ、…」（今昔物語、巻 24）

この種の例においては、「キル」にタリが接続し「座っている」という状態の維持が記述されていることに加え、前接するテ形がその状態と同時に発生している状況を記述していると解釈でき、座った状態で動作が進行していると解釈可能である。

この状況は、ノルウェー語、オランダ語、ブルガリア語といった言語に見られる姿勢動詞 (posture verb) を利用した進行形構文の文法化の経路に見られるものと同じであると考えられる (Kuteva 1999; Lemmens 2005)。次の例は、オランダ語に見られる *zitten* ('sit') を利用した進行形構文である (Lemmens 2005: p.183)。

- (2) Ik zat te lezen  
I sit to read-INF  
'I was reading'

Kuteva (1999) は、この種の進行形構文は、姿勢状態および姿勢状態とオーヴァーラップする状況を表現する複文が単文化することによって発生したと述べている。

本研究では、熊本方言データからの知見も利用し、Kuteva (1999) の言うこの文法化のプロセスと同様のプロセスが日本語のアスペクト形式シテイルの文法化においても発生したと主張する。本主張の詳細は、発表時に述べる予定である。

#### 4. おわりに

本研究は、日本語の存在動詞イルが結果維持を表現し、同時的な2つの出来事を表現する複文の単文化がシテイル形式の文法化の動機づけであると主張した。

#### 参考文献

- Kuteva, T. A. (1999). On 'sit'/'stand'/'lie' auxiliation. *Linguistics*, **37** (2), 191–213.  
Lemmens, M. (2005). Aspectual Posture Verb Constructions in Dutch. *Journal of Germanic Linguistics*, **17** (3), 183–217.  
金水敏 (2006). 『日本語存在表現の歴史』。ひつじ出版。  
高橋太郎 (1985). 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』。秀英出版。  
日本語記述文法研究会 (編) (2007). 『現代日本語文法』, 3巻。くろしお出版。  
森山卓郎 (1988). 『日本語動詞述語文の研究』。明治書院。

## The ordering of functional categories in the Japanese verb cluster

ナロック・ハイコ (東北大学)

A number of syntactic theories have posited hierarchical clause structures of functional categories, which are believed to be universal. Evidence include word order and behavior in embedded clauses. However, relatively little systematic cross-linguistic evidence has been made available so far. In this paper, I will present corpus data from Modern Japanese that puts some assumption in these theories in question.

## 情報構造のマーカ―としての博多方言の終助詞バイとタイ

長野明子 (東北大学)

博多方言を含む肥筑方言に特徴的な終助詞の中に、バイとタイというペアがある。バイとタイは次のように平叙文の文末で相互排他的に使われる。共起はしない。

- (a) 西鉄バスならどこでも見かける {バイ／タイ}
- (b) 祝い目出度と博多一本締めでお開き {バイ／タイ}
- (c) 博多の冬は意外と寒い {バイ／タイ} (平川 2008: 199)

バイとタイの使い分けに関し、坪内 (1995, 2001) らが聞き手に対する伝達態度という観点から分析するのに対し、本発表では、バイ文とタイ文は、それぞれ Rizzi (1997) のいう主題構文と焦点構文であると主張する。この分析ならば、坪内 (ibid.) らの様々な使い分けデータを説明できるだけでなく、バイ・タイが独り言でも使えることやバイ文とタイ文での音調の違いを説明できる。Rizzi (ibid.) の分離 CP 仮説のもとで、バイのバは **Topic** 主要部の形態素、タイのタは **Focus** 主要部の形態素、そして両者に共通するイは **Force** 主要部 (値は「平叙文」) の形態素であるという分析を行う。

形態的・意味的特性による中国語結果複合動詞の体系化への試み  
～日本語 VV 複合動詞との対応関係を視野に入れて～

結果複合動詞は、中国語研究の中でよく議論されているテーマの一つであり、Li (1990, 1993, 1995, 1999)の一連の研究をはじめ、Her (2007)や Li (2009)や沈 (2013)など、近年まで多くの理論的研究がなされてきた。結果複合動詞の意味論と統語論に焦点を当てた Li の一連の研究や Her (2007)の研究にせよ、形態論に焦点を当てた Li (2009)の研究にせよ、いずれも、いわゆる“追累”(追う-疲れる)などの V2 が状態変化を表すタイプの結果複合動詞について議論しているものが多い。しかしながら、中国語結果複合動詞は、Li and Thompson (1981), 刘 (他) (1983), Packard (2000)などでも指摘されているように、“追累”(追う-疲れる)タイプ以外にも2つのタイプがあり、中国語結果複合動詞は大きく3つのタイプに分けられるといわれている。

そこで、本発表では、次の2点について議論し分析する。1点目は、結果複合動詞に関する形態的・意味的特性を考察することで中国語結果複合動詞の体系化をめざすことである。2点目は、その考察結果から日本語 VV 複合動詞との類似点と相違点を浮き彫りにすることである。

具体的には、中国語結果複合動詞に、“追累”(追う-疲れる)などの V2 が状態変化を表すタイプと、“买到”(買う-着く(=買った))などの V2 の意味が希薄化しているタイプと、そして、“走去”(歩く-行く)などの V2 が方向を表すタイプの3つが存在することを述べる。この V2 が方向を表すタイプは、さらに3つのタイプ(“走上”(歩く-上)、“走去”(歩く-行く)、“走上去”(歩く-上-行く))に細分化され、合計5つのタイプに分けられる。この5つのタイプに対して、仮に、順に Type1 (“追累”), Type2 (“买到”), Type3 (“走上”), Type4 (“走去”), Type5 (“走上去”)としておくと、これらは、V1 と V2 の間に目的語を挿入できるかどうか、V1 を別の表現で置き換えられるかどうか、V1 の直後にアスペクト助詞が現れるかどうかなどを調べることで、次の表に示すような体系化を試みることができることを示す。すなわち、中国語結果複合動詞における V1 と V2 の形態的・意味的關係性には、V1V2 が切り離し可能、切り離

し不可能、そして切り離し不可能なだけでなく、さらに V2 の意味までが希薄化していくという段階性があることを示す。

Type5, Type 4	Type3, Type1	Type2
V1 と V2 の緊密性：低	V1 と V2 の緊密性：中	V1 と V2 の緊密性：高 V2 の意味の希薄化

上記の表で得られた結果から、Type5 と Type4 は V2 が統語的な句に付くものと考えられ、そのほかは、V2 が語に付くものと考えられることを提案し、中国語結果複合動詞にも、日本語 VV 複合動詞で観察されるような、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の区別があることを示す。また、中国語と日本語の比較を通して、VV 型複合動詞の本質を探ることにいくらかの貢献ができるものと考えられる。

#### 参考文献

- Her, One-Soon. (2007). Argument-function mismatches in Mandarin resultatives: A lexical mapping account. *Lingua*, 117, 221-246.
- Li, Chao. (2009) On the headedness of Mandarin resultative verb compounds. *Concentric: Studies in Linguistics* 35.1: 27-63.
- Li, Yafei. (1990). On Chinese V-V compounds. *Natural Language and Linguistic Theory*, 8, 177-207.
- Li, Yafei. (1993). Head and Aspectuality. *Language*, 69, 480-504.
- Li, Yafei. (1995). The thematic hierarchy and causativity. *Natural Language and Linguistic Theory*, 13, 255-282.
- Li, Yafei. (1999). Cross-componential causativity. *Natural Language and Linguistic Theory*, 17, 445-497.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. (1981). *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. University of California Press, Berkeley.
- 刘月华・潘文娱・故[韦华] (1983) 《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社, 北京.
- Packard, L. Jerome. (2000). *The Morphology of Chinese: A Linguistic and Cognitive Approach*. Cambridge University Press, Cambridge.